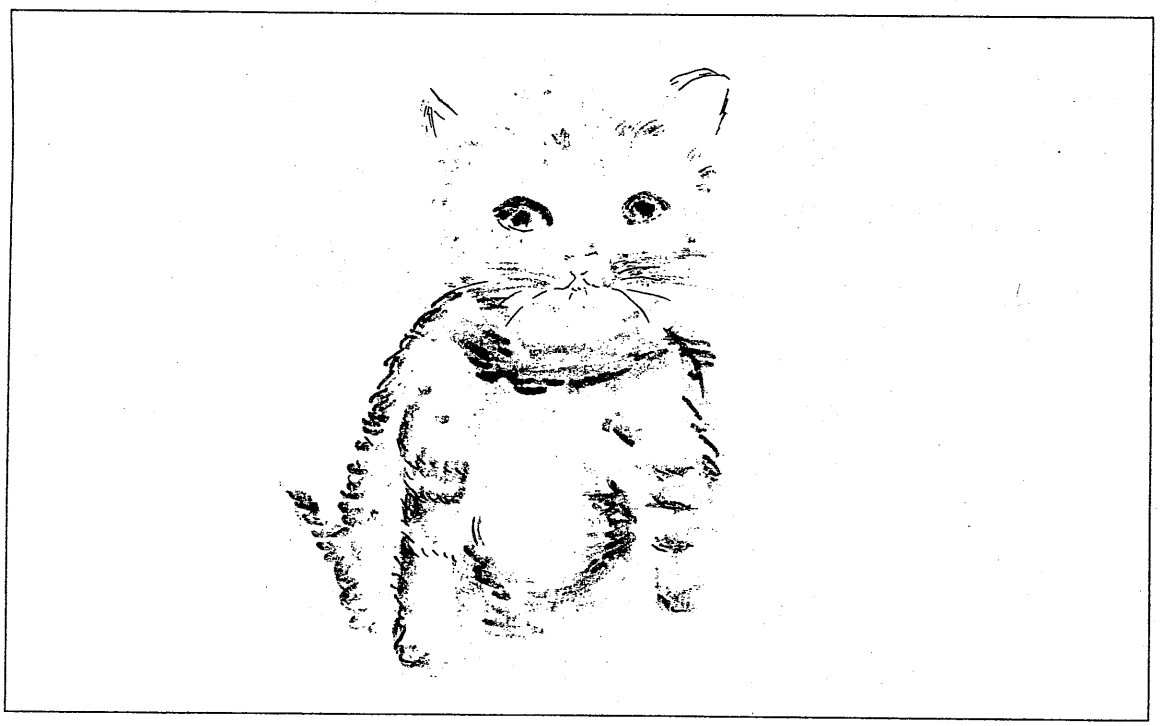
オリーブの樹

第10号
2002年 3月28日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

P 3　独居より　重信房子
P 5　プリズナージャーナル⑨
P 13　じゅんこのフォトメモリー　あの頃のパレスチナ①
P 16　読者からの声
P 18　シゲに捧げる「私小説」その8　山田美枝子

重信房子さんを支える会

≪独居より≫

春に向かって

重信房子

こういう処に居ると、しみじみと月暦(太陰暦)が、人間と自然との関係にとってどれほどハーモニーを持っているかが判ります。太陽暦に慣れ親しんでいた為に、これまで気に留めなかった季節の月暦の数々に、なるほど！と、感嘆しています。

立春が終わった後、枯木立は、一瞬曇空の中で、えんじ色に萌えたつように見え、２月の最後の日曜日には、凍て土と思っていた夜のあちこちの小さな株から、陽を浴びて、いっせいに犬ふぐりがルリ色の花を咲かせました。よく見ると、寒さのために防御して小ぶりになった犬ふぐりの間から、やはりかたくなな様子で、ピンクの鮮やかな小さな花、ホトケノザも咲いていました。春なんですね。１２月から１月へと寒さに向かう時よりも、立春を越えると、たとえ寒さのぶり返しがあるとしても、一刻一刻が春に向かっていくのが実感出来ます。

獄に居て、日本の政治と共に、やはり、自分の国の様にパレスチナを案じます。９・１１以来、悪化し続け、イスラエルによって被占領地全体が法の無い監獄と化し、自治も破壊されている中で、娘たちまで自らの死を賭して闘う壮烈な時を迎えています。女性が決死の闘いに参加するということが「女子供を守る」イスラム社会を知るが故に、その痛ましさは、社会全般に危機がつのっているように思われます。

獄中でパレスチナに連帯する記憶を刻印する意味で、パレスチナ・アラブの記事を新聞から毎日書き溜めています。そんな形からしか連帯できませんが、こうした厳しいパレスチナの状況の中で、嬉しかったことがあります。

２月１６日、イスラエル最大の平和団体ピースナウの主催による一万人以上のユダヤ人の集会が開かれたことです。新聞の小さな記事では、「１６日テルアビブで、イスラエル軍のヨルダン川西岸や、ガザからの撤退を求める一万人規模の集会を開いた。集会には、右派政党メレツのヨシ・サリド党員や、PLOエルサレム代表のサリ・ヌセイベ氏らも参加した」としか、書かれていませんが、住民たちの意志が伝わってきます。

パレスチナ人の射殺される小さな記事と、時として、パレスチナの若者たちの命をかけた攻撃によって、イスラエル兵が死傷したという少し大きな記事。

血と涙と爆撃に命をさらされる困難な生活の日々を、日本の新聞から掴むことは難しいでしょう。広告のおどる新聞の国際面のほんの一こまになってしか、日本社会に反映されないで来ました。でも、９・１１以降流血と戦争の拡大の結果として、少し多く日本の新聞にも扱われてきましたが、日本の人々にとって、遠い社会の出来事です。戦争の記事の合間の上記の記事は、イスラエルシャロン政権の無制限の暴力支配が、イスラエル内部から否定されつつあり、出口の無い冒険は敗北するだろうことを示しています。立ち上ろうとする人々の意志と声が聞こえます。

更に２月２１日の新聞は、「イスラエルは予備役兵らが、西岸やガザの軍務拒否を表明するなど、両地域からの撤退を求める声が出はじめている。拒否は２０日までに２６０人を超え、『西岸・ガザでの軍事行動は、イスラエルの保安確保につながらず、パレスチナ人支配が目的』と主張」という記事が続きました。そして、パレスチナ側がレバノンのヒズボラ(神の党)が正義性をもって、レバノン南部からイスラエル軍を撤退させたように、その戦略をモデルとして、「占領地である西岸地区、ガザ地区は、正当な闘争として国際社会も容認すると見ている。アラファトも過激派摘発を放棄。米国も調停に消極的、まとめ役が不在」と解説しています。

シャロン政権の鉄拳政策。あのシャロンの１９８２年のベイルート侵略のように、軍事力によって破壊し、殺し、屈服させる政策は、物質力によって「攻撃」は出来ます。比較にならない物質力、武装力で、攻撃するのですから。しかし、レバノンがそうであったように、鉄拳政策では、解決が出来ないのです。

レバノンの人民のやむにやまれぬ反撃によって、当時イスラエルの民が軍の指令に疑問を呈し、家族が目覚めました。それは、自分の息子や夫を守りたいという利己主義からスタートしても人間的であるが故に、普遍的な価値となって、人々を揺さぶり共感を育て、不当な侵略の非人間的行為の持続を崩壊させます。ベトナム戦争も１９８２年イスラエルの

侵略もそうでした。

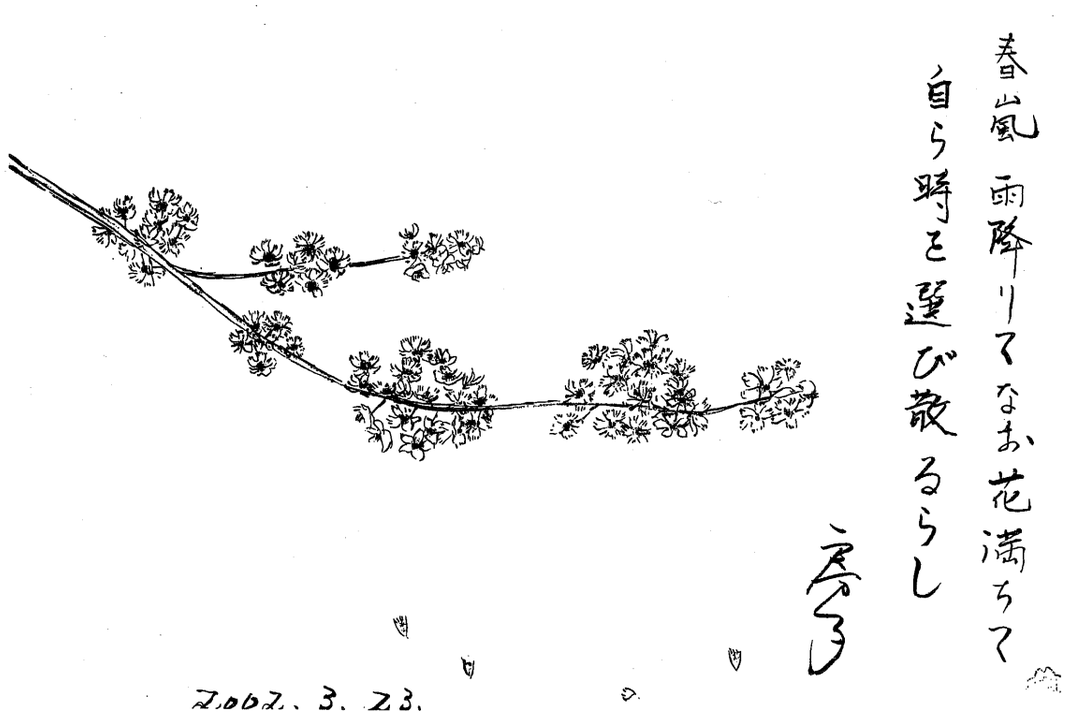
今、弱さ故の軍事狂謀でしかない姿をシャロン政権は曝しつつあります。国際的、国内的に、シャロン政権によって、ユダヤ人社会に解決の道があるのか？を問い、とりわけ被占領地の自治区への再占領を問い、兵役を拒否しはじめています。パレスチナ人民の“自爆”をなじる表層の９・１１ジレンマのまやかしよりも太く、力強い潮流として、和平を求める声が渦巻いていくのが判ります。今こそ平和を。パワーゲームの大国との取引のようなそれではなく、住民、住んでいる人々ユダヤ人もパレスチナ人も望む平和を！その願いが、暴力に打ちひしがれながらも、立ち上り、殺されてもまた立ち上り、パレスチナにもイスラエルにも育っていることが分かります。

シャロン政権の道徳的な死は、軍事支配を極限まで行使しつつ、自らが敗北していくことに気づかずに、歴史のごみ箱に退く運命にあります。今住民たちの願いに根ざして、まずもって、パレスチナ国家独立を自治政府、国連が一体となって宣言し、和平を破壊するシャロン政権への西岸・ガザへの侵略を禁じる制裁こそ、新しい和平へのスターとラインとなるでしょう。もちろん、９・１１以降の世界は、それを難しくしていますが、その希望をテルアビブの集会は、予兆していませんか？

丁度、ワシントンから、３月に、チェイニー副大統領が、イラクへと侵略戦争を拡大するためのシフトの形成の為、中東諸国を訪れると報じられています。アメリカのブッシュ政権は、シャロンと軍事同盟の元、机をひっくり返すように、イラクに戦争を仕掛け、パレスチナもひっくり返し、ドミノ的に中東全域にきれいに親米勢力の傀儡政権を作りたいのです。こうした中東への根底的アメリカ化の野望は、ドミノが逆ドミノとなって、イスラエルや中東の現存親米勢力や米国本国へと跳ね返るでしょう。軍事冒険による制圧のリアクションが危機を地球大に拡大させるように思います。

だからこそ、パレスチナ人民の正義に基づく平和の願いを受けて、小さなユダヤ人たちのテルアビブからのパレスチナ人との共存の訴えは、逆に、地を這い、人々の連帯をグローバルに育て、各国政府の倫理や政策を問わずにはおかないでしょう。

春に向かおう。自然界の流れに乗って、春を創り出そう。萌える陽をパレスチナに！



プリズナージャーナル⑨

重信房子

第13回法廷出廷記　2月18日

法廷への道すがら

昨日２月 17 日から、ブッシュ大統領が来日しました。昨日来、ブッシュ訪日中の首都圏交通規制の話が、獄中のラジオ放送で何度も流れていました。（獄中では、土、日曜日は、ＴＢＳや文化放送の歌番組などが長時間そのまま流れます。ドライバーのカーラジオへの配慮もあってか、首都圏交通規制が繰り返されます。）

アラブの人々がジョークでこんなことを言ってました。「我アラブでは、アラブの大義の前で、統一がうまくいかず、分裂する理由を知っている？アラブの政治家は、全員が優れた政治のプロなのだよ。一人二人がプロで優れているのではなく、全員優れているため、収拾がつかないのさ。」

それ程、アラブの人々は、茶飲み話にまで政治を語ります。ブッシュ大統領が来るなら、街中の人々が、ブッシュの政策の是と非を論じ合い、「我が国は、どういう関係を結ぶべきか？」と口角泡を飛ばして語り合うでしょう。“ブッシュが来るから”と何回も交通規制の話はあるけれど、ブッシュが何をし、何を提起すべきかと、街の人々がラジオの合間で語るのは、日本ではあり得ないのだ、と改めて思いました。

それぞれの国の文化は違いがあって、興味も楽しみもあり、多元的な共存が生まれるのでしょうが、日本もワイドショーとはいえ、茶の間と政治が結びつきつつあるのでしょうか。小泉、田中、鈴木問題として。アラブでは停電や給水と政治が即結びつき関わっていくけど、日本では、自分の家や水や電気と政治が結びつかないので、プロに任せてしまうのでしょうか。そのプロが、鈴木さんたちみたいに勝手なことをするので、また、政治がバカバカしく無視したいものでしかないのでしょうか。面会室のプラスティック越しに娘から「なぜ日本の人は発言の権利を行使しないのか？なぜ『戦争をしない権利』を捨てようとするのか？」と聞かれて、答えに詰まったことがありました。

丁度今日、月曜日の出廷、地方裁判所近辺は、ブッシュの行動範囲と重なるようです。

晴天の中、看守の数より少ない被告人男女を乗せた大型バスで、8 時前に出発しました。高速の渋滞を避けて、前と同じ、墨田公園沿いを通ります。荒川を越えてから、いつも高速道路に入り、東京に向かって、右手に隅田川を見下ろしながら行くのですが、一般道を通ると、反対に左手に川が位置します。高速から見えるホームレスのビニールハウスは見えないけれど、台東リバーサイドスポーツセンターなど墨田公園に沿っていく時、寒椿がこぼれるように咲き誇っていました。この寒椿の裏の土手に、ビニールハウスの寒さの中、ホームレスの人々が居るのだろうなあと見えない分余計気になりました。一般道の小さな道沿いの空き地、名の知らない小さな寺に梅が咲き誇っています。さらに行くと、言問橋の際を通りました。上野、浅草、神田と進むと、隅々に制服の警官がパトロールしているのか、目立ちます。銀座、日比谷に入ると、大勢の制服。その中を護送車は、スイスイと通ります。首都警戒体制なのでしょう。

開廷

13時15分、１０４号法廷。前回から、裁判長と左陪席裁判官が新しい人になっています。挨拶をして、私が着席すると、傍聴人の入廷を求め、人々がどっと入ってきました。大学時代、高校時代の友人や、娘の友人たちもありがとうございます。

裁判長より開廷と同時に裁判の更新手続きについて、弁護士に尋ねました。「更新手続き」とは、裁判長が変わった時など、改めて初公判の時のような手続きが行われたり、また、「従前通り」という一言で継続したりと、方法はいくつかバージョンがあるようです。前回私が意見書を準備していた点が、事前打ち合わせで、触れられていなかった為でしょうか。大谷弁護士から、次々回、このＹ証人尋問が一段落した後で、行う旨告げられました。それを告げられたので、裁判長は、「それでは証人を」と、Ｙ証人の登場を促しました。

Ｙ証人はゆっくり入廷し、ゆっくり挨拶をして、席に着きました。

裁判長は、前回に引き続いて、先の宣誓の効力は維持されていることを告げ、記憶の通り答えるよう

告げて、始まりました。

2年前、川村弁護士に会った目的と様子

今日は、弁護側からの反対尋問が、前回に続いて行われます。まず、川村弁護士が、質問を始めました。

川村弁護士「一昨年7月頃、証人と自宅で会っているのですが、7月20日、海の日だったと思いますが、どうですか？」

Y証人「間違いありません。」

川村弁護士「当日何の目的で私が尋ねたのか覚えていますか？」

Y証人「はい和光晴生さんのことで、ご存知のことがあれば、伺いたいとのことでした。」

重信逮捕以前から、和光公判の為に、川村弁護士が、Y証人と会っていた点が明らかにされました。

前回、前々回の公判の中で、川村弁護士が、検事調べの最中に介入してきたりしたなどの調書や公判でのやりとりがありましたが、その調書の不正確さをまず確認しました。同時に、7月に川村弁護士と会ったその時点から、Y証人が、ハーグ事件に関して、一貫した証言を弁護士にも検事にも話しており、それが調書の作文過程で、歪められているという点について、弁護士は徐々に明らかにしていきました。

川村弁護士と初対面の7月20日、一つはハーグ事件に関して、知っていることとして、ハーグ事件は、アブハニ、カルロス、和光ラインで、実行したのが真実です、ということを話した点。2点目は、総括会議のことを話題に出したが、Y証人は総括会議自身が記憶になく、総括会議については答えられなかったこと。また、川村弁護士が「公判で、和光さんが事実関係は認める予定である」点を伝え、「公判では、殺意だけを争う」という話をしたところ、

Y証人が「殺意とは？」と聞き返した後で、「突入した時のアクシデントで、応戦したときの状況であって、殺意ではない」と答えていた点が語られました。

重信逮捕後の警察の動きとYさんの事情

後に、Yさんは長澤検事と初めて重信逮捕後の11月に会うことになるのですが、こうした話が全く違うストーリー調書になってしまったわけです。その点について、以下のようなやりとりがありました。

川村弁護士「重信さんの逮捕を知ったのはいつですか？」

Y証人「学校に当時通っていて、授業中にかって取り調べに来ていた富山県警のT刑事からの携帯への着信記録だったので、休み時間に電話したら、重信さんが逮捕されたので、伺いたいとのことでした。」

川村弁護士「T刑事は来たのですか？」

Y証人「はい。これまでの経緯から、私Yに対する取り調べ予算とか出ているので、他から取り調べが来ても、自分たち以外には答えないように、と言われました。」

当時の警察の縄張り意識の様子が語られました。

川村弁護士「東京地検の取り調べに対しては？」

Y証人「前に和光さんの件で、取り調べようとしたことがあったみたいだが、当時は出稼ぎ中で、自宅を離れていました。その線で繋がっていて、湊事務官から、自宅に電話があった。参考に意見を聞きたいと言うことで。」

川村弁護士「1986年の帰国の時は、調書に応じていませんね。今回は調書に応じている。どうして取り調べに応じたのですか？」

Y証人「大きく2点くらい言えると思う。1点は、家庭の事情。2点目は、重信さんが逮捕され、歴史的に一定のところに来たので、私に言えることは、公表してもいいと、判断したことです。」

川村弁護士「家庭の事情とは？」

Y証人「その時点で、自分も逮捕されるだろうと考えていて、それは避けたいというのがあった。当時収入は無しで、妻に頼っていた。今も同じ状態です。そこに来て、その前の年から完全なパンク。メニュエル病、左耳難聴、糖尿病と心臓、それに腰痛で、寝込んでいた。そこに、取り調べが入ってきた。妻の方が、長澤検事の母と同じ膠原病でしたが、薬の影響で弱く、転倒して陥没骨折となり、また、父が2回目の脳梗塞で倒れ、母の方が看病疲れで倒れ、

姉が看病していました。その姉のところに刑事が来て、重信逮捕で弟がどうのこうのということで、姉は客相手の商売なので大変困る。妻の実家も倒産で不況。1回逮捕され、23日拘束されると困る。私としては、何とか新しい事実でなくても、私が居なくなることを避けたい、逮捕を避けたいと思っていました。」

川村弁護士「失業中で、身体が悪い。妻、姉も逮捕されたら困る。逮捕されたら誰が困るのですか？」

Y証人「長期のローンを抱えていて、妻が働いているので、生きている状態です。私の逮捕が公になれば、妻は職場から追放され、明日から困るという状態でした。」

川村弁護士「素性が公になれば、妻、姉の仕事が出来ないので、逮捕は避けたい。逮捕は確立として高いと思っていたのか？」

Y証人「はい。16年前出頭して以来、短期刑で出所した。それ以降も、監視と調査名目で来て、いろいろな刑で逮捕したいと脅迫めいたことは言われていたので、今回はそうなるだろうと思っていた。」

強圧的な長澤検事の取り調べ状況

川村弁護士「取り調べは、2000年11月16日から18日の3日間ですね。初日の16日の取り調べ開始冒頭で、長澤検事は何と言ったのですか？」

Y証人「長澤検事と湊事務官は、一緒でした。『実は今日福島経由で着いた。私は泉水、和光、西川を訪問して、意見を聞いて、君のところに来た。重信房子が逮捕されたので、関連した人々から事情を聞いている。ちょっと意見をお聴きしたいが、いいですか？』という軽い調子だった。」

川村弁護士「3日間の取り調べの特徴は？どういう雰囲気でしたか？」

Y証人「最初意見を伺いたいと。30代の人で、前のことに詳しくない。話がかみ合わないので、補足しないと辻褄が合わない。次に、長澤検事は、上司から獲得目標があるので聞きなさいと指図を受けてて、成果無いと困るという態度が見受けられた。調書一杯作る。成績上げたい。16日、17日、18日と、だんだん強圧的になってきた。」「地元で、調べた時、地方分局の2階で調べ。2階建ての建物。30分位調べると、1階に下りて電話して、また質問。同じパターンで終始続く。上司の方にお伺いたてて、質問のパターンがそうなっていた。」と、1時間に何回も席を立って、長澤検事が上の指示を確認しつつ、尋問していた様子が語られました。

川村弁護士の「『翻訳』、パリ事件についてはどう答えたのですか？」と言う質問に対し、パリで逮捕された際のフランス証言と同じことを答えていた点が語られました。

川村弁護士「ハーグ事件は？」

Y証人「当時は、日本の人々は、組織とはほど遠い。アブハニ、カルロス、和光ラインで行われ、重信さんは関係ないと、言いました。」

川村弁護士「川村が7月に話した内容と同じですか？」

Y証人「同じです。」

川村弁護士「総括会議については？」

Y証人「総括会議は、自分は出てないと答えると、長澤検事は、戸平調書にあると、私を叱りつけるような形になった。」

川村弁護士「そうすると、『翻訳』であれ、パリ事件、ハーグ事件にせよ、総括会議も、長澤検事が納得する内容ではないのか？」

Y証人「長澤検事は、強圧的で、怒っている感じで、『じゃあ』と出て行く。」

川村弁護士「初日からそうですか？」

Y証人「そう。」

川村弁護士「他人の調書を見せたのか？」

Y証人「見せた方がよいところは見せた。長澤検事は、知識がないので、今まである素材を見せて読んだ。西川調書、戸平調書、S調書、G調書、それに新聞、雑誌、単行本など。」

川村弁護士「それらを示すことによって、どうしようと長澤検事がしたのか？」

Y証人「知らない。『違う』ということを変更させたいということ。『西川の調書では、重信指示書と同じで、パリでYが捕まった時のミッションは、Yがヨーロッパ部隊にハッパをかける為に行ったとなっている。『翻訳』がアブハニのメッセンジャーだけだったのはおかしい』とか、『アブハニはハゲと呼んでいただろう』と言い、同時に長澤自身が自分の上司をハゲと呼んでいた。」

川村弁護士「ハーグ指令書があるんだよ、と言われたのですか？」

Y証人「総括会議というものがあったと言われたが、出た記憶がない。『どこでいつもたれたのか？』と言うので、『知らない』と言うと、更には、『戸平調書に全部あるんだ。こんなにきちんと書いてある』と言うので、『そこまで知ってるなら、聞く必要ないでしょう』とムッとした。」と、当時の攻防の様子が伝えられます。

川村弁護士「長澤検事はだんだん怒って強圧的になったのですか？」

Ｙ証人「強圧的だが、殴る蹴るとか、暴力的ではないということ。『今回の重信逮捕は、国家危機管理委員会、高検の何か出来ていて、それなりに納得する回答を出さないといけないので、その為にはあること無いことも報告成果を出さないといけない』と言っていた。『嘘は言えない』と言うと、『いや、嘘吐いている』とか、『喋っていない』と、外堀を埋めるという調べがあった。私は、言えるところは話しているので、『それ以上無駄だ』『そこまで言うなら、帰らしてくれ』と言うと、長澤検事が『うちの方も下に行って聞いたが、喋らないなら、任意は取り消して、強制にする』と言ってきた。喋らなければ、23日、放り込んで取り調べるということ。」

川村弁護士「逮捕される覚えがあるのか？」

Ｙ証人「長澤検事が、シンガポール事件、ダッカ事件で、『シンガポールは証拠写真がある』実際、事件現場を望遠レンズで撮ったもの。提出されている調書に付いている。ダッカは、乗客の証言調書がある。アルジェ空港で、受け入れ時にＹが居たという証言。『ここで話をしても駄目なので、東京で令状で、正式に取り調べる』と脅す。」

「また、湊事務官も、長澤検事が１階に下りて時間が長いので、その間話をしていたが、長澤検事がドアをパタンと閉めて、Ｙと話して埒があかないので、『東京に聞いてみる』と出かける。湊事務官が、『バケツで放射能と同じだなあ』と言う。『任意で取り調べは終わりですね』と長澤検事が言うと、湊事務官がフォローするという具合。『逮捕があり得るか？』と湊事務官に聞いたら、『私は何も申し上げられないが、長澤とは長い付き合いだが、もう駄目でしょうね』と答えた」と、不安感をかき立てつつ、不当な取り調べが行われた様が繰り返し語られました。

そうした中で、自分が言ったことと違う調書になって出来ていくということが行われていったとのことです。

調書に署名押印した理由

川村弁護士「そのような内容の調書に署名押印したのは何故ですか？」

Ｙ証人「3つくらいの点があった。第１に、調書に対する考えが曖昧だったこと。第２に、精神状態。第３に、重要度を理解していなかった。」

自分が逮捕されることが心配だったこと。そして、このように調書が利用されると考えていたら、応じなかっただろうと語られました。

「16年前と同じに対処したと思う。自分の身に降りかかることには、全力で対処した。今回自分が被疑者でないし、みんなが判っている事実を言っている。過度にねじ曲げられた事実でない限り、そんなに問題がないかなと思った。何か長澤検事に言って、自分が引っ張られることは避けようとしていた。」

川村弁護士「ハーグでの調書も、検事にこれは自分が言ったのと違うよ、と何故言わないのか？」

Ｙ証人「長澤検事は、異議を申し立てるのを許さない。人の意見を聞く耳を持っていない。言ってもしょうがないと思いました。いちいち反論するのは、バカバカしいと。自分に不利になることは反論したが。たとえば、パリに自分が運んだアタッシュケースの中身を知らないとか。」

川村弁護士「長澤検事から、これは公判で使う。場合によっては、公判に出てもらうと言われませんでしたか？」

Ｙ証人「喋らなければ、裁判に出てもらって、全社会的に不利になるので、ここで喋った方が良い、という手段として応じた」と、長澤検事に載せられた形で、対応したことが示されました。

そして、事態を心配した妻が、86年出頭時の鈴木弁護士に電話を試み、当時、川村弁護士にも、逮捕の備えとして、電話したことが語られました。長澤検事より、逮捕をちらつかされ、川村弁護士から、「あなたが逮捕されることはない」と言われて、一安心したが、それまで、日本に帰ってきてからも、友人居ないので、川村弁護士から言われ、ありがたかったと、Ｙ証人。

川村弁護士「その時たたけば誇りの一つや二つあるので、と言いましたね？」

Ｙ証人「そう答えたし、今もそう思っている。」

東京地方検察庁の取り調べ

その後、東京へ、2000年11月引き続いて、長澤検事に粘り続けられます。25日に出てきて、さらに調書を取られていきました。東京地検の取り調べにおいても、12階だか14階の隣の部屋が上司の部屋になっていて、長澤検事は入り口からピストン輸送のように上の指示に従って調べていた様子が、Ｙ証人から具体的に語られました。

そして、東京での調べは、強圧的でもなく、新しいことを聞くのではなく、まとめという感じで会ったこと。長澤検事自身が全県をゆだねられて無く、決断できず、席を立つことが多く、隣に行くので時間がかかったこと。調書がたくさんで、バージョンが一杯あるので、整合するのに時間がかかっていたとのことでした。

25日、26日と調書が作られたのだが、この間は、11月16日から18日の地元での調べを肉付けする総集編という感じであったとのことです。

そして、「何点かはＹが認めていないのを詰めるという感じでした。アブハニではなく、重信さんが大きな役割を果たしたとしたい。長澤検事は、重信首謀、実行部隊和光と、アブハニ関係無しにしたかった。『無理矢理、私に、そういうことを聞いても無い』と私が言うと、『詰めろと上から言われているので』とか『うちのアブハニに聞いてくるから』とか言っていた。」

「77年以降重信さんが主軸になったのは、そうだが、75年以前はそういうことではないし、認めることも出来ない」と主張し続けたこと。新しい供述をした覚えもないこと。

総括会議についても「会議に出てないのでよく知りません」と答えたこと。「そうすると『戸平がこういった』とか『ビルの何階だ』とか言うので、『正確にあるなら書いたら』といいました。」

当時の腰痛について、弁護士に聞かれ、泣き言になるので、検事に言わなかったが、シャワーも浴びれない状態だったこと。検察官側も、時間が限られていたので、腰痛への配慮もなかったことが語られました。

調書確認においては、「自分に不利かどうか保身的なところで見ていて、自分以外のところは余りよく見ていない。」

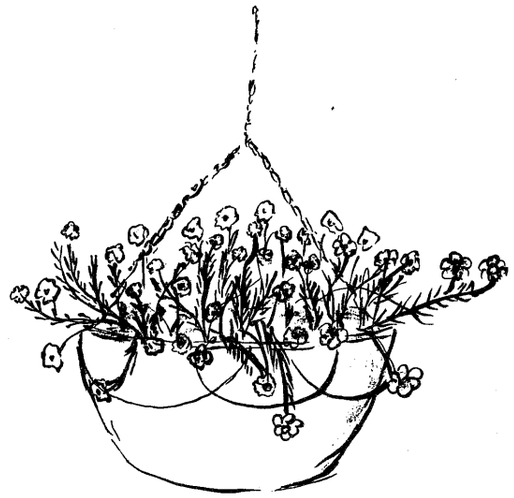
川村弁護士「ハーグ事件に関し、11月26日調書に、重信関与が出ているが、喋ったつもりもないし、自分の刑事責任に関わることがなければ、よく見ずということで、署名したのか？」

Ｙ証人「そうですね。16日から18日の地元での話のまとめということで。和光さんは認めているし、重信さんは関係ないので」署名したとのことでした。

川村弁護士に7月20日会って、縷々同じことを説明してきたこと。アブハニ、和光、カルロスラインで、と答えてきたし、重信関与になった供述調書が作られたという考えはない、と答えました。

署名押印を拒否した調書のこと

そして、更に、11月30日については署名押印を1通だけ拒否したものがあったこと。その中身は、



「さすがの鈍感な私でも、受け入れられない。大分忘れたことはあるが、“私Ｙは、重信の下で働いていた者で、申し上げます”で始まり、“1974年ハーグに関しては、重信が首謀者であることを確認し、実行者はＯＯ”という露骨な文書でした。」「長澤検事に拒否すると、“これがあると、着地がしっかりしていい”と言っていた」ことが暴露されました。そして、「長澤検事も“やっぱり駄目ですか。俺も駄目だと思ったんだよな”と言っていた。」

驚くべき偽証工作です。びっくりしてしまいました。「ハゲ」などと長澤に呼ばれてたことを証言されても動じない牧野検事の方を見てみると、憮然とした表情の検事３人が同じ顔なので、またびっくりしました。

川村弁護士が質問し、明らかにした点は、検察側が重信を何が何でも首謀者にする為に、ＰＦＬＰの関与すらなくして、重刑を策動している様子が語られました。時制で言うと、私が丁度ハーグ事件で起訴になるのが、１１月30日。同時並行の日程です。逮捕起訴の理由がない為に、Ｙ証人をどれだけ突破口にしようとして、Ｙさんの不安を拡大させ作文していったのか、恐ろしいなあと思いながら聞いていました。

既に３時近くて、休憩に入ります。裁判長は、今日中にＹ証人を終わらせようと、強い決意で言いました。検察側は、「弁護側が主尋問のようになっているので、我々としては、２時間は必要」と答え、弁護側もまだ掛かるということで、休憩中にＹ証人尋問はもう一度延びることが確認されたようです。

長澤調書の矛盾について

30分の休憩を挟んで、3時半から、大谷弁護士からの質問から再開しました。川村弁護士によって、調書がかなり長澤作文であることが示された上で、ここでは、その作文が誤りの多いものである為、それらの語句の内容の矛盾についての反対尋問が中心となりました。調書には、余りにも具体的変遷・変化がある為です。例えば、政治部門と国際作戦部が別であるにもかかわらず、混同されている点。

大谷弁護士「あなたはアブハニを政治部門の人間と考えたことはあるか？そのように長澤検事に供述したことはあるか？」

Ｙ証人「無いです。」

大谷弁護士「11月26日調書では、『重信さんは、ＰＦＬＰの政治部門としてのハダトと太いパイプを持ち』と、こう言った記憶無い？」

Ｙ証人「無いです。」そして、「調書にそんなことが書かれていたことに気付いていなかった」と答えました。

また、シリアにランディングして以降、Ｙ証人、西川さんらは、トランプなどで遊んでいたが、和光さんが総括作業に入った理由が尋ねられました。

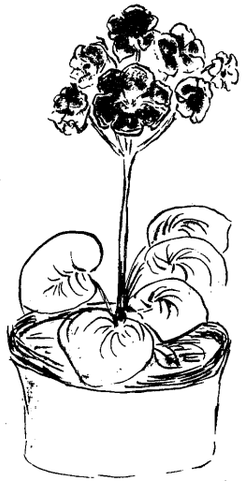
Ｙ証人「それだけ深刻に受け止めた。」

大谷弁護士「深刻とは、ランディングとか武器の問題か？」

Ｙ証人「それは些末なことで、以前から考えていた党的な関係の問題。」

大谷弁護士「投降地は事前に決めるのか？」

Ｙ証人「大まかに決めてあったかも知れない。」



大谷弁護士「素人なので聞くが、アデンに行く時、事前に了解を取り付けてゆくのか？」

Ｙ証人「事前に了解はない。機密上も私が立案者なら言わない。アブハニは対モサドもあり、教えない。」と、事前にアデン側に話が付いていることはあり得ず、「調書で『アブハニがアデンに行けと言った』とあるが、それ自身が長澤の作文である。」

大谷弁護士「重信さんがアデン政府に何かできる立場になかったか？」

Ｙ証人「全くない。当時もそういう事情になかった。長澤検事に、重信さんはそういう立場になく、無理だと言った。日本人が一国政府に依頼できることではない、何の権限もないし、と言ったと思う。」

大谷弁護士「作戦に関しては、和光さんに直接聞いたことは？」

Ｙ証人「無い。」

大谷弁護士「長澤調書では『和光がこう言った』となっているが」

Ｙ証人は、当時、西川さんから、和光さんがカルロスに対して怒っていると間接的に聞いたこと。カルロスが持ってくる武器を、ミッシェル・ムガベルが持ってこず、武器関係はミッシェルだったからだが、長澤検事には、名前出てないので、敢えて言わずに来たこと。また、重信さんは、武器のイロハも判っていないし、タッチしていない。武器も知らないし、軍事的な関係で介入することはない、と当時の調書を否定しました。

調書が作られていく様子とＹ証人の対応の弱さ

また、長澤の調書にある「アブハニが副議長」とかの記述もあり得ないこと。「過激闘争」とか「実力部隊」とか、Ｙ証人が使用しない言葉が使われていること。総括会議の「記憶がない」と言ったことが、11月26日調書では、「重信が武器は2丁しか調達できず、ＰＦＬＰに頼んだことが云々」とか、「重信はちゃんとやったけど、相手のあることなのでと言った」とか、Ｙ証人曰く、「私が言ったことはない。『誰かの調書にそういう話があった』と言い、全く私が言ってないことがポロッと入る。『誰々の調書に書いてある』と言われると、迎合的に、『そうかも知れませんね』ということで、「自分が承知していない内容になっていく」様子が語られました。

そして、それに対して「削除してくれ」という風に対応しない出来たことなどが語られました。迎合、自己保身、誤解（調書作れば公判に引っ張り出されない。実は調書を作れば引っ張り出されるのだが。）に加えて不注意。書かれたものを一つ一つ校正する気もないので、点検もせずに、署名押印という中で、検察側は主語を足したりしながら、重信を共謀または首謀の位置に何とか調書を作り上げていったようです。

弁護士の反対尋問がまだまだあったようですが、既に4時20分。検事側の採取尋問に少しでも入ってもらうということで、弁護側の反対尋問を終わりました。

検事側の再主尋問開始

検事たちは、検事側証人のＹさんが、回を増す毎に、長澤検事の調書作成での問題として出てくるので、憮然とした様子です。「検察の威信にかけて、重刑を課す」と、私の取り調べで、長澤検事が最後の捨てぜりふを言って、席を立ったことを思い出します。

西谷検事から、まず、再主尋問が始まりました。

西谷検事「弁護士の反対尋問で、重信被告が情宣を担当していたとのこと。ハーグより前、重信被告が行っていた活動は、他にどういうことがあったか？」

Ｙ証人「子育て、日本から来る人との話、リビアからのハイジャッカーたちの釈放に関する奪還の話。」

西谷検事「その他にあなたの覚えているものは？」

Ｙ証人「養育中心でした。」

西谷検事「証人が、軍事秘密活動に重信被告はタッチしていない、と答えましたね。」

Ｙ証人「そう。」

西谷検事「重信被告は、Ｙとか和光とか動かしたり指示したり出来ないのですか？」

Ｙ証人「軍事作戦は出来ない。」

西谷検事「ドバイ事件について、理解されているか？」、「軍事の絡みで指示を受けたりはないのか？」

Ｙ証人「全く出来ない。」

ドバイ事件（73年7月20日）について

西谷検事「弁護士に、Ｙ証人は、ハダトはお金の為に作戦実行したと言った。ハダトは、ドバイ事件では、犯行を秘密にやりたかったと言いましたね。ハダトが立案計画し、お金を取りたかったと。」

Ｙ証人「当時日本人は、ハダトが作戦やるのに、口挿める立場ではなかった。」

西谷検事「誰に、いつ聞いたのか？」「日本人が単なる金集めに異論を唱えたことあったか否か？」「他の日本人から聞いたのか？」と、矢継ぎ早に質問しました。そして、「ドバイ事件での足立記者会見（73年8月13日）が誰の指示だったのか？」「アブハニが指示してやらせたのではないか？」「誰の指示をどういう背景で行われたのか？」「重信被告が出た『3時のあなた』のインタヴューは、73年8月14日に放送された。足立と同じ頃重信さんが『3時のあなた』の取材に応じている。何の為か？誰かの指示を受けて、やったのではないのか？」などと、アブハニとの関係を言いたいのでしょう。Ｙ証人に反論し、「私にはなんとも言えない」と答えさせています。また、検事は、「弁護士の反対尋問で、Ｙ証人が『アブハニと重信被告は対立していて、仲良くなかった』と言うが、重信被告とアブハニは連絡を取り合っていたのではないか？」とか、アブハニとの関係を質問します。

Ｙ証人「アブハニは、外国に潜伏していて、政治局会議で、ベイルートの来た時とか、時々アルハダフとかに来た時会う。」

西谷検事「何の為に重信被告を訪ねるのか？」

Ｙ証人「ハダトは党員なので、政治局会議に来た折りに話すことはあったと思う。」

西谷検事は「重信被告は、ハダトと連絡を取り合っていた」ということをしきりに言うので、Ｙ証人は「ＰＦＬＰの組織のルールに則って、ほとんど連絡取り合っていない」と繰り返します。

そう言うと、「接触頻度は？」とか、「ハダトが重信被告に指示しなかったのか？」としつこく言うので、Ｙ証人は「ハダトが指示する時は、直接でなく、Ｙ証人や和光さんを経由した」と答えました。「何の為に？」と西谷が追及するので、「『お金かしてほしい』とか『ジャーナリストを使いたい』とか」と答え、西谷検事が「軍事に絡んでは？」と聞き返し、「無いと思います」と答えました。

この辺がしつこいのは、アブハニと重信が直接連絡を頻繁に取り合う友好的関係としないと、全体のストーリーが崩れてしまう為でしょう。

シンガポール、クウェート作戦のこと

また、シンガポール、クウェート作戦の調査を欧州の日本人グループがやった、とＹ証人が話したと言うことで、「誰がやったのか？」「日本人だという根拠は？」と追及しました。

シンガポールのことで逮捕を脅かされているＹ証

人は、「私の推察」と答えるしかありませんでした。検事側は「推測ですね」と、裁判長に印象づければいいわけです。

また、弁護士の質問で、アデンの軍事訓練に参加したかとかハダトに言われて、重信と一緒にウィーンに行く時どういう根拠でどのようにヨーロッパに行ったのか？その際、偽造の旅券や免許証を使いましたよね！と、裁判長にわざわざ偽造を印象付ける為に繰り返して確認しているうちに、もう5時近くなりました。

閉廷から帰路に

次回3月22日、もう一度Y証人出廷を確認して、今日の証言は終わりました。Y証人は、旧友たちを傍聴席に探しながら、退廷していました。傍聴人の退廷です。

3時の休憩を挟んで、多少人数が減っていたと思ったら、違う顔の人々が居ます。傍聴席の友人たちに挨拶。高校の友人、ニトログリセリンを飲んで、体調くずしていたと言っていたけど大丈夫？今日は素敵なスーツで、元気そうだけど。

大学の旧友、いつもありがとう。関西の友人も、東京の旧友も元気そう。東京の旧友、公判中咳き込んでたけど大丈夫？みんな元気ですか？私の関与で訴因変更となり、公判が延びて先日判決があった山本さんも髪を短く若々しそう！みんなありがとう！公判で筆を走らせている合間に、ついでにふっとついて出た歌も書き留めました。公判の筆記に大変な割に、歌なんか作っているのか！と言われそうですが。

友が笑む　傍聴の席　取り払い
熱く語らん　６０年代

帰りは、6時近くに出発したので、今年初めての月を見ました。細い中天の月を、護送車の窓に首を近づけ、首を真上に向けて仰ぎ見ながら帰りました。冬の月は、私の房からは、角度が変わって、少し上の方になるせいか見ることが出来ず、前回1月21日の公判は雨の中だったので、今年初めての月見です。

ブッシュ訪日交通規制のせいか、いつもこの時間は30分位で、スイスイと帰り着くのに、ずっと切れ目なく車が続いて、時々徐行しながら、高速を通って帰りました。高速道の上から、下のにぎやかな交差点の横にある小さな公園に、満開の白梅が咲き誇っているのを、夜景のように眺めながら帰りました。

梅日和　高速道から見下ろして
護送車の行く　如月の夜

被告人　護送の道の　梅見かな

池畔に思いの丈を閉じ込めて
言問橋を護送車が行く
唐子

じゅんこのフォトメモリー

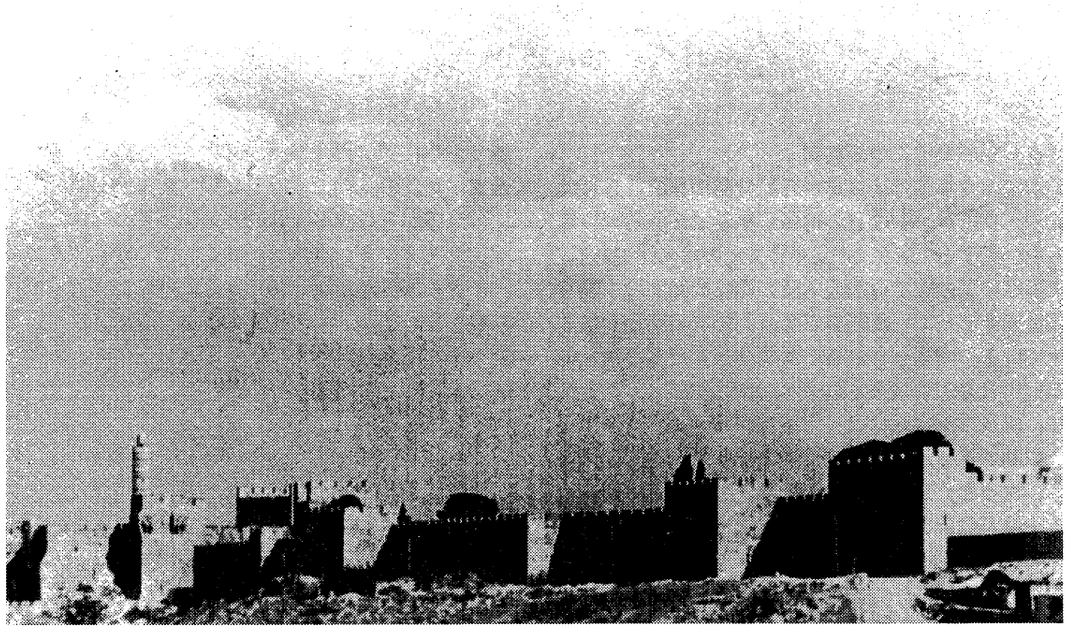
あの頃のパレスチナ

今回は、エルサレム旧市街ダマスカス門附近に住むアラブ人の姿を中心に紹介します。

タイヤの中古品でゴムのバケツ（？）を作って売っているアラブ人。このバケツは石を運ぶのに使う。

旧市街のアラブ人の子供。アラブ人の家は天井が高く、一室だけしかない。小さい子供が多く、粗末な服装が目立つ。

ナツメヤシのジュースを売っている人。



エルサレム旧市街。高い壁に囲まれている。７つの門から出入りでき、当時２つは閉まったまま。中は、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒、アルメニア人の４つの地区に分かれている。

アラブの靴屋さん

カメラマン紹介

じゅんこ：１９４８年北海道生まれ、東京の写真学校卒業後、新聞記者を経て、１９７２年、２４歳でイスラエルのキブツへ。一度帰国し、１９７５年、２７歳の時、エルサレムの写真集を作る為、再びイスラエルへ。ヘブライ大学で語学を学びながら、写真を撮り続けた。１９８９年、４１歳で死去。

読者からの声

「維持」の代償

月光仮面

「食」をめぐる二つの話題

中国は今年３月２０日から新食品法を施行し、大豆やトウモロコシなどの遺伝子組み換え農産物の輸入を制限することにした。あわてたのは米国である。米国は中国のＷＴＯ加盟承認の際に農産物の中国市場進出を狙っていた経緯があり、対中姿勢を硬化させている。問題とされるのは貿易赤字だろう。米国の対中貿易赤字は日本のそれを上回っていることから、報復法案作成に動く可能性が高い。

中国の遺伝子組み換え作物に対する懸念それ自体は、まったく正当なものである。遺伝子を操作された生物が環境に放出されたときの生物、生態学的な影響については分からないことが多すぎる。しかしながら、今回の中国の決定には別の側面もありそうだ。中国は、ＷＴＯ加盟のための条件受け入れを表明したとき、ＷＴＯが義務付ける農産物市場への最低輸入量受け入れに強い懸念を抱いていた。３月５日から始まった全人代での朱鎔基首相の報告を待つまでもなく、改革・開放から取り残された現在の中国農業、農村は非常に厳しい状況に置かれているうえに、中国農業は小規模な生産方式で労働効率が低く、トウモロコシ、大豆、小麦などは国際価格よりも高い。そこに、自国の水資源などの生態系の破壊の上に成立する、大規模生産方式と補助金で武装した安価な米国産農産物が入ってくるということは、中国の存在そのものを揺るがしかねないだろう。後者の理由から、中国はＥＵや日本の遺伝子組み換え作物対策を参考にして、新食品法を打ち出してきたことは明白である。

第二次大戦後の米国の世界戦略で重要な役割を果たしたのは食糧である。食糧援助や「緑の革命」などの技術援助は当該国の農業を破壊し、第３世界の貧困の重要な原因になっている。貧困が９・１１のような「テロ」の原因であると言われているが、多くのアル・カーイダメンバーを輩出したエジプトの貧困の原因の一つに農業破壊があげられている。その原因は、洪水農業の否定＝アスワン・ダム建設とサダト大統領時代の米国への急接近による、米国からの大量の食糧援助だった。８０年代初め、農業破壊によって食えなくなり、カイロに流入してきた人達に対し、エジプト政府は故郷に帰るか、旧ソ連と闘うためにアフガンの戦場に行くか、の二者択一をせまった。多くの人達はアフガンを目指した。そこには米国からの資金と食物と武器が待っていた。米軍によるアフガン空爆が開始されたころ、アル・カーイダの家族達が出身国に送り返されたという報道に接した。アル・カーイダの少なくない人々は、家族ともども棄民化政策によって、アフガンを目指さざるをえなかったのだろう。

「食」をめぐるもう一つの話題とは、言わずと知れた食品不正表示である。当初、ＢＳＥに関連して、雪印食品が補助金をだまし取ろうとして工作を行ったと思われていたが、その後、雪印による不正表示はそれ以前から行われていたばかりか、全農など多くの業者が虚偽の表示に手を染めていたことが判明し、その広がりは止まるところを知らない勢いである。今回の不正表示事件には二つの異なったタイプがあることに注意しなければならないだろう。

（１） 産地を偽る―グルメ対応

（２） 飼育方法を偽る―安全指向対応

である。もちろん、両者が重なっている場合もある。

ところで、表示は正しければそれで良いのだろうか。表示されている内容そのものに問題はないのか。例えば防腐剤、例えば着色料。第二次大戦後、日本が本格的にケインズ主義的経済政策を導入した池田内閣以来、ある種の「不正表示」は常態化したといっても過言ではない。発ガン性の疑いのある防腐剤の大量使用によって、食品の大量生産・大量輸送が可能となり、その結果輸送体系を中心としたエネルギー浪費構造が形成された。一方で、様々な着色料の使用によって、安全性の観点からみると、食品としての適格性を喪失したものに対する購買意欲が煽られる。環境ホルモン問題でも明らかなように、資本主義を延命させるために考案されたものが、我々の生存基盤を崩壊させているのである。

７０年代半ば、防腐剤AF―２追放運動、新聞に連載された「複合汚染」などを契機にして、食品添加物への疑問が巻き起こり、それは今日まで続いている。この中から生まれた自然食ブームは、バブル期にグルメブームへと転形していったこれらのブームの中には、食品公害を生み出した根本原因であるケインズ主義的有効需要創出策への批判は存在せず、むしろそれを補完するものとなっている。

ケインズ主義的経済システムは、ケインズによって発明されたのではなく、１９３０年代の世界的な大不況を乗り切り、資本主義の延命を図るために、試行錯誤的に各国で導入された。米国のテネシー川総合開発、ナチス・ドイツのアウトバーン建設とフォルクスワーゲン生産、フランス人民戦線政府による基幹産業の国有化等々…。しかし、これらの政策も、基軸通貨を欠いていたため有効に機能せず、世界は戦争に突入していく。第二次大戦後の西側世界は基軸通貨＝ドルの存在下、各国はケインズ主義的諸政策を実行していく。ケネディ米大統領のニューフロンティア、池田内閣の所得倍増政策などがその典型であり、この時代、資本主義は永遠の繁栄を約束されたかのようであった。しかし、そこには社会それ自体の亀裂が内包されており、今日それが、取り返しつかないように思えるほどの形で露呈している。資本主義を維持するために、我々はどれほどの代償を払っているのか。

「悪の枢軸」への温度差

今年前半の流行語大賞になりそうな「悪の枢軸」であるが、名指しされたイラン、イラク、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と略記）への米政府関係者の位置付けは、非常な違いをみせている。もちろん、これら３国に対する批判は、ブッシュの一般教書演説の内容を踏襲しているが、今後の米国の対応方針には、大きな差違がみられるのである。

２月１２日、パウエル国務長官は、米上院財政委員会で、「イラン、北朝鮮とは対話を望むが、イラクについては、体制転覆に向けあらゆる選択肢を検討中」と証言した。２月の日米首脳会談でも、ブッシュ大統領は、対イランで日本の外交への期待を表明した。歴史的にも、また最近でも新油田の開発での合意など、日本はイランに太いパイプを持っている。米国は、それを利用して関係を改善したいということなのだろう。２月２４日、イランを訪問したアフガニスタン暫定行政機構のカルザイ議長は、「イランの対テロ、反タリバンの努力がアフガンの安定につながっている」と評価した。一見、米国を牽制するかのような内容であるが、実はイランに対する攻撃はないとする、米国のメッセージなのではないだろうか。というのは、カルザイ議長はアフガニスタンにパイプラインを建設しようと、９・１１直前までタリバンと交渉を続けていたユノカルのエージェントなのである。ブッシュの口からとても言えそうにないことを、カルザイに託して伝えさせた可能性は大きい。この時期、米政府の「本気度」を探る格好の出来事があった。２月２６日から２８日までの３日間、テヘランで第１回国際警察・警備保証博覧会なるものが開催されている。そこに、米企業数社が売り込みを前提として、米政府の対イラン経済制裁に抵触する製品を展示した。具体的には、モトローラが通信機器、ヒューレット・パッカードがコンピューター関連機器、スペース・イメージングが衛星写真、ペルコが監視カメラ、ビジョニスクが人の顔の識別装置、アポロ・セキュリティーが警備システムといった具合である。また、日系メーカーの電話盗聴装置も展示されていたという。米日企業の対イラン制裁破りは公然化している。

北朝鮮に対する批判、非難は、イランに対する言い方に比べれば、格段に強い。しかしながら、北朝鮮の国連大使による対話要求発言などもあり、水面下でなんらかの接触が行われている可能性はある。米国にとって、北朝鮮はある種の戦略的資産である。朝鮮半島の現状を固定化することによって、極東での軍事力展開の口実とすることが可能となる。基軸通貨国としての必須の条件の一つに、強大な軍事力があげられている。極東での軍の展開は、中国への睨みをきかすことと並んで、基軸通貨国の位置を維持するために、必要なことなのである。

ＵＳＡツデー紙は、２月１２日、国連安保理が対イラク制裁見直しを協議する今年５月を境に、軍事行動に踏み切る可能性があると報じた。その根拠として、中央軍司令部の各部隊司令官が湾岸へ移動中であること、イスラエル国防相がイラクからの報復攻撃を受けた時の対応を米国と協議、トルコ、サウ

ジ、ヨルダンは条件付きで軍事行動を容認・支持を米国に伝達など…。２月１４日の英・ガーディアン紙は、米政権の有力閣僚らは１月後半の会議で、経済封鎖によるイラク封じ込めは失敗に終わったと判断、フセイン体制打倒に向けた攻撃計画書をブッシュ大統領の手元に届けたと報じている。それによると、正面作戦の兵力は２０万人でクウェートから進攻、秘密作戦では特殊部隊を多用し、CIA はイラク北部のクルド人や南部のシーア派勢力など、反フセイン勢力に武器を提供、訓練を実施するというものである。

明日にでもフセイン打倒の攻撃が開始されそうな勢いであるが、２月も２０日を過ぎると別の情報が流れてくるようになる。２月２２日、ベーカー米駐日大使は読売新聞との会見で「イラク攻撃政策は採用されていない」と言い、２月２４日の米ワシントン・ポスト紙は米政府高官や専門家らの話しとして、軍事作戦の準備には最高で１年かかるとの見通しを伝えている。必要な精密誘導弾を確保するだけでも半年、政権内の意見統一、イラク周辺国などの支持取り付けなど残された課題は多いという。そして、イラク攻撃の際、米国が重要な役割を担当させようと目論んでいるクルド人勢力は２月２１日までに、「アフガニスタンで反タリバンの北部同盟が果たしたような役割は担わない」との立場を明言している。

米国のシナリオどおりに事が運ぶとどうなるであろうか。イラクのクルド人の解放は、トルコ、イランなどに住むクルド人に大きな影響を与えることになる。とりわけ、イスラエルと軍事同盟を結び、国内クルド人を徹底して武力弾圧してきた米国の同盟国＝トルコの政情は一気に不安定化するだろう。トルコがこれを容認するはずがない。また、イラク南部のシーア派勢力がポスト・フセインのイラクで重要な政治的位置を占めれば、この地域へのイランの影響力は格段に増大する。イラン・イスラム革命の波及を恐れた米国は、フセインをたきつけてイラン・イラク戦争を引き起こしたが、その目論みが瞬時にして水泡に帰してしまう。さらに、米国の同盟国であるサウジもまた、イランの勢力拡大を望まないだろう。

結局、米国の打つ手は、中東から中央アジアを混乱の極みに叩き込んでしまう。唯一こういう状況を待ち望んでいるものがあるとすれば、それは言わずと知れた米・軍需産業だろう。そして、軍需産業は冷戦構造崩壊後の約１０年間を除き、米国産業の牽引役であった。ウォール街が先導する経済体制は、世界各国の金融に大きな不安定性を生じさせてしまった。体制立て直しの息つぎとして、軍需産業が名乗りを上げたというところか。そのためには、世界各地で限定された緊張と戦闘を誘発しなければならない。ここにも、「維持」のための代償が要求されている。

投稿

シゲに捧げる「私小説」その８

山田美枝子

私は、母の一子が刑務所から帰って来てから、水商売でない働き口見つけるため家政婦学校というのに行ったのを思い出した。中野つや、という人がやっていた女子の更正を目指した施設だったようだ。そこを終えて、一子は個人の家庭の家政婦になった。しかし家事労働にむいているタイプではなかったし、人に終始命令されることに耐えていける人間でもなかった。雇用主とけんかした、とんとよく私にこぼした。

一子には昔から私は振り回されっぱなしだった。私は自分中心に動く前に、母親の一子を追い掛けなければならなかった。小学４年で祖母の冬が死んでしまってから、家に帰るとまず一子を探し回った。その頃から私の心は、不安定という船に乗せられて揺られ続けていた。父はとにかくほとんど家に居ないのだ。冬が生きている頃は、父は生活費を冬に渡すために帰って来たし、冬は私の手をひいて帰って来ない嫁の一子の勤め先を訪ねたりした。訪ねた時間はバーの開く前の昼ごろだったかも知れない。バーの外は誰も通っていなかった。白髪を小さくまとめ、着物姿の老女と小学生の女の子というとりあわせが訪ねていくのに似付かわしい場所ではなかった。冬にとって困ったことがあったのかもしれない。

そこは新宿の間口の狭いバーだった。祖母の冬がバーのドアを叩くと、若い女が顔を出した。冬がなにか言うと、ドアを開けたままその女が二階に向かう階段の下から、「ねえさん、お客さんよ」と声をかけた。二階から「はーい」という一子の高い声が返ってきた。私は、母がねえさんと呼ばれているのか、と考えていた。

階段の上に顔を出した一子は、上から私たちを認めるといやな顔をした。そして階段をとんとんと降りて来ると、「外に出て」と言った。ドアの外に祖母と二人で出て待っていると、サンダルをつっかけた一子がカーディガンを羽織って出てきて、冬に金をにぎらせた。そして「帰ってよ」と言った。私の方は見なかった。祖母は私の手を握って引き返しはじめた。私は一子を振り返った。一子は私にイーッと顔をしかめて見せた。母は私がじゃまなのだ、とその時思った。帰りに伊勢丹の食堂により、冬が「何でも好きなもの選びなさい」と私に言った。ショーウィンドウの中に、チョコレートパフェもお子さまランチもラーメンもカツ丼も並んでいた。でも私は選ぶことも口を開くこともしなかった。「お子さまランチがいいね、そうしようね」と冬が言っても、いやいやと頭を振り続けた。祖母は怒りだし、食堂に寄らずにバスに乗って初台にある家まで帰った。

祖母が死んで、夜中や明け方帰って来るようになった一子は、よく酔っ払っていた。酒臭い息をして帰って来て、ばかやろう、なにを言ってやんだい、うそつき、などと言って寝てしまうときもあれば、

「いま付き合っているひと、すごくハンサムで素敵よ」

と娘の私に自慢げに言うときもあった。そして時には、「はい、これホテルの石鹸、小さくて丁度いいでしょ」

とそのハンサムと行ったらしいホテルの石鹸を私にくれたりした。それで手を洗うと、私の小さい手はいい香りになり、私は何度も鼻をおしつけた。

それから半年くらい経ったろうか、一子は一晩帰って来なかった。次の日の朝帰って来ると、

「ああ苦しい、ああ苦しい、気持ち悪い」

と二日酔いの青い顔をしていた。そして、あのハンサムな男が結婚してしまった、と言って泣いた。一子の生活はだんだん荒んだものになっていった。一晩帰って来ない日が目立って多くなり、二晩、三晩と帰って来ない日もあった。小学校の高学年になっていた私は支払わなければならない給食袋など抱えて、心配しながら寝入ったりした。

社会人になった１２歳年上の春彦と高校生の京助はアパートを借り、家を出て行ってしまった。私はひとりで常に留守番だった。

中学生になった私は、なんでも自分のことは自分でやった。食料も下着も自分で買いそろえ、料理したり洗濯したりして過ごしていた。しかし気持はいつも母を追っていた。

シゲもその頃、世田谷の馬事公苑の近くに住み、給食費の支払いが滞ることに頭を悩ませていたらしい。しかし私と決定的に違うのは、シゲにはきちんとした意志のある両親が居り、仲のよい兄弟が居た。そして同じ貧しさでも、シゲは父親から、貧しいことは恥ずかしいことではないのだという教育まで受けている。そして学校に於いても、給食費が支払えないクラスメートをかばうために、学級委員として給食費の袋を集める係りを率先してやったりしていた。担任教師が給食費未払いの子の名前を連呼するのを事前に封じるための行動だった。そのあたりの意志のもち方が私とかなり違う。私の中には、そういう社会性は芽生えていなかった。私の父と母は、それぞれの性的生活に追われて、子供のことを顧みていないようだった。シゲの父と母は、真面目に人生に取り組み、それでもうまくいかないことを、ありのまま子供に示している。私の両親は、まったく社会に通用する論理で生きていない。私は今、そのあたりに重信メイさんとのわずかな共通性を感じる。（つづく）

支える会の会報「オリーブの樹」購読を継続してください

協力会員の皆様、ご支援ありがとうございます。

「オリーブの樹」も第１０号を発行できるはこびになりました。皆様のご協力の賜物です。また、会員の約半数の方から、継続会費をお送りいただいています。ただし、会費が切れたままになっている方も居られます。どうぞお支払い頂き、継続的に「オリーブの樹」を購読くださいますよう、お願いします。編集部一同、皆様のご支援に感謝し、今後も定期発行を続けていきたいと張り切っています。

また、一人でも多くの友人・知人に声をかけて、「オリーブの樹」の読者を広げていただくことを、お願いします。

会費は、月２０００円です。会員には会報「オリーブの樹」を、無料で毎月郵送します。

「オリーブの樹」の「購読だけしたい」という方の購読料も、会費と同額（２０００円）です。住所、宛名を明記し、代金を送っていただければ、次の号からお送りします。

いずれの場合も、会計の都合上、1年分（２４０００円）か、半年分（１２０００円）をまとめて送金していただくと、大変助かります。郵便振替（番号下記）をご利用いただければ便利です。

会費および購読料は、重信さんの支援に充てられます。是非協力してください。

次回公判日程

４月２４日（水）１３時１５分
５月１７日（金）１３時１５分
６月　５日（水）１３時１５分
６月２８日（金）１３時１５分
７月１９日（金）１３時１５分

東京地裁（　最寄り駅　地下鉄　霞ヶ関　）　１０４法廷

傍聴券の配布は、開廷の２０～４０分前です。確実に傍聴を希望する方は、早めに地裁前に集合される方がいいでしょう。

後記

東京では、九州より早く桜が咲き、もう満開を過ぎて散りはじめています。余りに早く桜前線が北上して、桜を味わうチャンスを逃した人も多いのではないでしょうか。これも地球の温暖化の表れなのでしょうか。日本の豊かな四季が壊されていく現象の深化でないことを祈ります。

今月から、新しく重信さんの「独居から」を連載して行きます。今月は、春に向かって、パレスチナでの新しい闘いがテーマです。拘置所の中で、人々の解放に向けて何か出来ないかと模索努力する重信さんの姿が浮かび上がります。

もうひとつ新しい企画は、女性カメラマンじゅんこさんが約３０年前にパレスチナに渡り、そこに住むパレスチナの人々を撮った写真を連載で載せていきます。重信さんが隣国レバノンに居て活躍していた、丁度同じ時期に、彼女は日本人カメラマンとしてパレスチナで活躍していました。彼女の視線の温かさの向こうに、重信さんが求めていた人々との交流と共通する何かが見えてくるような作品ですね。

またも「オリーブの樹Ｑ＆Ａ」を今回載せられなくて、申し訳ありません。次回には、きっと載せられるようにしてゆきますので、お許しください。

読者の皆様からのお便りが少なくなっています。遠慮無く皆様の意見、批判、提案、イラスト、なんでもお寄せください。お待ちしています。春です。新しい息吹を共に創り出していきましょう。(Y)

連絡先　〒105-0004　東京都港区新橋 2-8-16　石田ビル４階
救援連絡センター気付　「オリーブの樹」事務局
郵便振替　00110-4-613941　オリーブの木

「正誤」表

第10号

①3P左8行目　　凍て土と思っていた夜の→思っていた庭の
②4P右7行目　　～盟の元→盟の下
③8P右22行目　　載せられ～→乗せられ～
④8P右30行目　　たたけば誇り→たたけば埃
⑤8P下から1行目　　全県をゆだねられ→全権を～